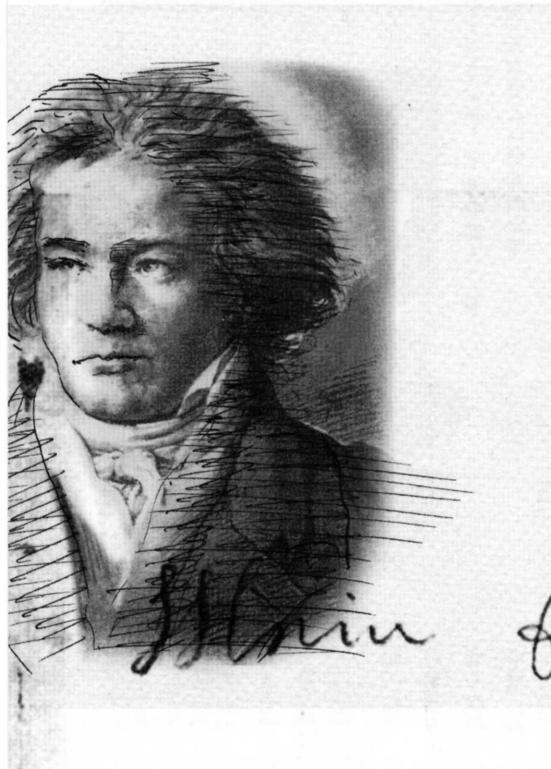


## 没後180年記念レクチャー・コンサート

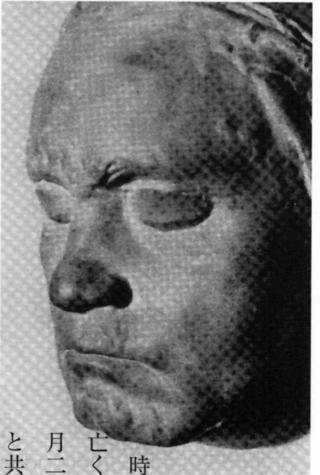
# 不滅の戀人にみる ベートーヴェンの變貌



2007年 2月2日 (金) 19:00開演

## ルーテル市ヶ谷センター

主催：知と文明のフォーラム 協賛：楽友会フロイデ 後援：株式会社平凡社



## ベートーヴェンの謎 「不滅の恋人」 青木やよひ

時ならぬ嵐の夕べにベートーヴェンが五六歳で亡くなつたのは、今から一八〇年前、一八二七年三月二六日のことだつた。その翌日、他の重要書類と共に、秘密の引き出しから彼自身の手による一通の手紙が発見された。これが、宛名もなく年代の記入もない有名な『不滅の恋人』への手紙である。

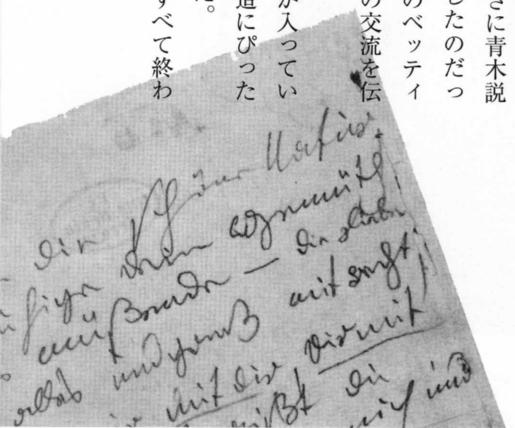
いつたい、ベートーヴェンが『不滅の恋人』とよんで永遠の愛を誓つた女性とは誰なのか？

多くの研究者がその謎に挑戦した結果、その手紙はベートーヴェンが四二歳になろうとする年の夏、ボヘミアの温泉地で書いたものと判明した。書かれてからすでに一〇〇年が経つていた。だが、恋人が誰かはいぜん謎だつた。

二〇世紀後半になつて、マイナード・ソロモンや青木やよひによつて、アントニニア・ブレンターノ説が急浮上してきた。そしてまださまざまな異論がある中で、二〇〇〇年秋に、まさに青木説を裏づける未発表の資料が突如出現したのだつた。アントニニア自身が、親しい義妹のベッティナに宛てて、ベートーヴェンとの愛の交流を伝えた手紙である。

さらに二〇〇二年には、問題の手紙が入つていったといわれる机の秘密の引き出しの構造にびつたり当てはまる小さな木箱が出現したのだ。

こうして『恋人』をめぐる謎解きはすべて終わ



つたといつてよい。しかしその研究の過程で、これまでには、異性の愛も知らず、貧窮と孤独の人生を送つたとされてきたこの芸術家の生涯が、まったく別の様相の下に見えるようになつた。一九世纪の前半、すでにベートーヴェンは女性に対する対等な人格を認め、美しさだけでなく、豊かな教養や繊細な感受性を求めていた。女性たちもまた、卓越した彼の才能と共にそうした人間性に惹かれ、恋愛と同時に厚い友愛を寄せていていたこともわかつている。

これはいわば、従来の『樂聖』ベートーヴェンの変貌ともいうべき現象だつた。「ハイリゲンシユタットの遺書」が初期から中期への様式の転換点となつたように、『恋人』問題は、中期から後期への決定的な転換点となつてゐる。後期様式の内面には、悲劇に打ちのめされながらも、自己自身への誠実さを貫き通した人の魂の奥深さがかいませ見る。

人生の意味がつかみにくく、また軽くなつてしまつた現代のわれわれにとって、彼の世界は汲めどもつきない深い泉のように思われる。

今年はちょうど、この手紙が発見されてから一八〇年目に当たる。私のこの研究が、二一世紀にふさわしいベートーヴェン像が生まれる手がかりとなればうれしい。

l

i m m o r t a l

講演・〈不滅の恋人〉にみるベートーヴェンの変貌

青木やよひ

楽曲解説・ベートーヴェンの後期様式と作品の意味

北沢方邦

青木やよひ

ヨンヒ・パーク

休憩

ピアノ演奏・ベートーヴェン ピアノ・ソナタ ホ長調 作品109

ヨンヒ・パーク

# ベートーヴェンの変貌と最後の三つのピアノ・ソナタ 北沢方邦

『ミサ・ソレムニス』の自筆譜を手にするベートーヴェン



## ベートーヴェンの変貌

バッハから話をはじめよう。私は昔、バッハの宗教曲、とりわけカンタータをあまり好きではなかった。厳肅な美に満ちているといつても、どの曲も似たように聴こえ、退屈してしまうからである。長い遍歴のすえ、ルツター派の牙城ライプツィヒにやつてきたバッハが最後に到達した、敬虔な信仰に裏打ちされた崇高な境地は、非キリスト教徒である私にはついに理解できないのだと考えていた。一九世紀から二〇世紀半ばまで、ドイツ・ナショナリズムによつて確立されたこうしたバッハ像に、なんの疑いも抱かなかつたからである。

だがドイツ・ナショナリズムの呪縛が解け、戦後発見された新しい資料や自筆譜の検討によつて、バッハがいやいやがらライプツィヒに移り、ごく短期間にカンタータなど膨大な数の礼拝音楽を義務として書いたことが判明し、旧いバッハ像は昔をたてて崩壊した（もちろんそれらの宗教曲の価値が失われたわけではない）。

同じことがわが国のベートーヴェン像についてもいえよう。戦前、小学校の校門に置かれていた二宮尊徳像や、音楽室に飾られていた『ミサ・ソレムニス』の自筆譜を手にするベートーヴェンの肖像画は、富国強兵のために刻苦勉励して学業に

はげめ、というわが国のナショナリズムと、そのための日本的な禁欲主義のメッセージを伝えるものであつたといつても過言ではない。

戦後、日本のナショナリズムそのものは崩壊したが、ロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』（ロラン自身この本が誤りであったことを認めているが）などの影響下に、苦惱と貧窮のなかから偉大な作品をつくりあげた禁欲主義的英雄あるいは楽聖ベートーヴェンという像は依然として継承されてきた。だがこれほど彼の真の人間像や音楽から遠いものはない。たとえば彼は、インド哲学をも涉獵するほどの教養や知性をもち、芸術的好奇心や探求心にあふれる他方で、なかなかの美食家であつたり、駄洒落が好きであつたり、あるいはすぐれた多くの女性たちに愛されたりと、生活を十分に楽しむゆとりをもつっていた。

しかしその彼が、人生の半ばにして〈不滅の恋人〉との出会いを契機に、劇的な変貌をとげる。ウイーン会議を機会に世俗的名声をえたのとは裏腹に、みずから之内に閉じこもり、音楽のなかに人間はもちろんのこと、自然や宇宙まで包括する深い思想的表現を探求しはじめる。それが後期の諸作品であり、様式である。その変貌の原因はなんであつたか、またどのように変わったのか、それが本日のトーキーの主題である。いいかえればベ



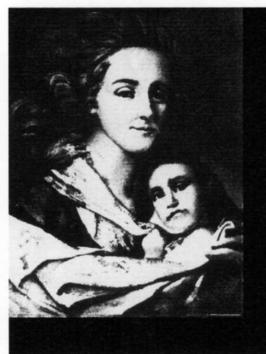
カフエで新聞片手に  
政治談議をするベートーヴェン

ートーヴェン像の変貌と同時に、ベートーヴェン自身の変貌の問題である。

### ベートーヴェン『ピアノ・ソナタ』

フリッタースドルフ夫人となつたマクシミリアーネ

ホ長調作品109



マクシミリアーネに献呈された  
『ピアノ・ソナタ作品109』の表紙

ロマン・ロランが「ブレンターノ・ソナタ」と名づけたように（『復活の歌』）、作品109、作品110、作品111の三曲は、たんに献呈者の関連だけではなく、内面的な深い表現の関連をもつていて。献呈者の関連とは、作品109がマクシミリアーネ・ブレンターノに捧げられ、作品110と作品111がその母アントニア・ブレンターノに捧げられる予定であったからである。だが最終的には作品111のロンドン版を除いて、作品110は献呈者なし、作品111の献呈者はルドルフ大公となつた。

しかしより重要なのは、その内面的関連である。献呈の辞につづけて、「私はいまラントシュトラッセにいます」と書きだす情愛に満ちた手紙を添えて、ベートーヴェンは作品109をマクシミリアーネに贈っている。ウイーンのラントシュトラッセとは、一八一一年彼がはじめて〈不滅の恋人〉アントニアに会つた、彼女の実家ビルケンシュトルク邸のある街路である。その頃幼かつたマクシミリアーネは、お茶目ないたずらで彼を悩ませる他方で、もつともお気に入りの子供であつた。

「ラントシュトラッセにいます」のひとことで、ベートーヴェンと母アントニア、そして彼女と

いう三位一体の幸福な日々の記憶が、マクシミリアーネの胸中にもよみがえつたにちがいない。

この郷愁と情愛のソナタともいべき作品109、

さらに〈不滅の恋人〉との劇的な破局とその苦悩の追憶、いいかえればエウリディケーを失つたオルフェウスの嘆きの歌である作品110、その終曲のフーガの歩みによつても癒されなかつた苦悩との格闘と、それによつて浄化され、到達した清澄な境地をうたつた作品111と、われわれは「ブレンターノ・ソナタ」三曲の内面的関連を指摘することができる。

この作品109は、そのなかでもつとも規模の小さいソナタであるが、抒情と郷愁に溢れているだけではなく、他の言語に訳しがたいドイツ語“ハイマートリッヒ”（故郷的）のもつとも深い意味を表現しているともいえる。詩人ノヴァーリスのことば、「いざこへ？ つねにハイマート（故郷）へ」は、それがわれわれのいうふるさとではなく、人類の魂のふるさとであることを示している。

#### ■ 第一楽章

抒情的なモデラート・カンタービレの部分と、その昂揚が波のように碎け散る幻想曲風のアダージョ・エスプレッシーヴォの部分とが交錯する、きわめて自由なソナタ形式である。

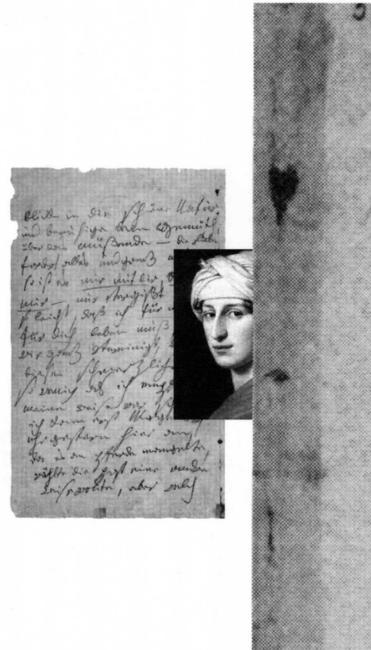
#### ■ 第二楽章

第一楽章にすぐつづけて演奏されるホ短調八分の六拍子のプレステイッシュモであり、その躍動的リズムと上昇する音型は、〈不滅の恋人〉と過ご

ベートーヴェンが残した〈不滅の恋人〉への手紙を読むと、恋愛という域では收まらない、永遠に湧き出る泉のようなベートーヴェンの愛を感じます。そのような愛へと導いた、ベートーヴェンが「私の天使」と呼んだその恋人とはいったい誰なのか……。

## ベートーヴェンの演奏に 新しい視点を得て

ヨンヒ・パーク



『遙かなる恋人に』 楽譜手稿



し、第七、第八の二つの交響曲を書いた一八一一年、一八一二年の夏にみなぎっていた、彼の力強い生命力を思い起させる。作品110の第二楽章とも共通する、駆馬車の快活なリズムを想起させるような、二拍子系のスケルツォ（本来は四分の三拍子）ともいうべき性格と形式をもつ。

### ■ 第三楽章

主題と六曲の変奏曲、そして主題の再現で構成される。十分に歌う、もつとも内面的感情を込めて、とドイツ語の発想記号が書かれたこの主題は、たんに抒情的というよりも後期様式に特有の深い瞑想性を帶びている。とりわけ後半は、連作歌曲『遙かなる恋人へ』の終曲で切々とうたわれる「愛する心を捧げたひとに、愛する心は届くに

ちがない』の旋律が、そのまま流用されている。この旋律がアレグロ・ヴィヴァーチェで飛び跳ねる第三変奏の後、主題のようによりゆつたりと、の発想が書かれた第四変奏の、流れるような一六分音符の三声のたわむれ、そして第五変奏アレグロ・マ・ノン・トロッポの三声のフレガ風の確固としたあゆみ、などは、幸福な三位一体時代の追憶であるのかもしれない。それはふたたび瞑想的な、しかしだいに遙かな高みへと飛翔する第六変奏にひきつがれ、主題を再現して終わる。

後期様式に特有の、主題の旋律よりもその性格や内面性を自在に表現する変奏曲形式で書かれている。

青木先生は「〈不滅の恋人〉問題を追究す

る意味とは、〈手紙〉の名宛人を割り出すという単なる謎解きにあるのではない。それは生々發展するベートーヴェンの魂のドラマに、これまでとは別の仕方で光を当てることにあるのだ」とご著書のひとつの中に書いておられます。それはベートーヴェンの作品を演奏する場合にも求められることです。ベートーヴェンの人間性を尊び、時代や国を超えた同じ人間としての対等な眼差しをもつて、ベートーヴェンに歩み寄る研究を続けてこられた青木先生の情熱に敬服いたします。

また、今回出版された「決定版ベートーヴェン〈不滅の恋人〉の探求」に北沢先生によるベートーヴェンの楽曲解説がありますが、北沢先生はその中に、「ベートーヴェンのピアノ曲や歌曲に、もっぱら彼の私的で個人的なメツセージや感情の痕跡のみを探求するのではなく、それらの個的で人間的な体験を無視しては、これらの楽曲の深いレベルでの理解は不可能といえる。深いレベルでの理解とは、楽譜というテクストの構成上の理解を超えて、そのコンテクスト（文脈）としての意味の理解である」と書いておられ、とても共感いたします。

青木先生も北沢先生もベートーヴェンの作品からその人生と時代を読みでおられて、グローバルな視点からベートーヴェンの存在と音楽について説いてくださり、大変勉強させていただいております。

このたびは、このような素晴らしいお二方のご指導の下、皆様と共にベートーヴェンへ想いを馳せることができますことを大変嬉しく存じます。

#### 出演者プロフィール



青木やよひ



北沢方邦

音楽社会学、科学認識論、構造人類学専攻。桐朋学園大学教授、信州大学教授、神戸芸術工科大学・同大学院教授を経て、現在信州大学名譽教授。音楽社会学関係の著書に、「メタファーとしての音」（新芸術社）、「北沢方邦音楽入門」（平凡社）など。科学認識論関係の著書に、「知と宇宙の波動」（平凡社）、「近代科学の終焉」（藤原書店）など。構造人類学関係の著書に、「天と海からの使信」（朝日出版社）、「日本神話のコスモロジー」、「歳時記のコスモロジー」、「古事記の宇宙論」（いずれも平凡社）、「感性としての日本思想」（藤原書店）など。

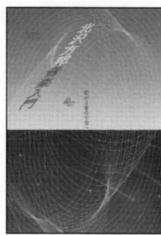
ヨンヒ・パーク



四歳より桐朋学園子供のための音楽教室にて学び、桐朋女子高等学校音楽科を卒業後、一九九四年に渡欧。チューリッヒ国立音楽大学を最優秀で卒業、同大学研究科修了。ピアノを北村陽子、H・シュヴィンマー他各氏に師事。ヴァイオリンを鶴見健彰、チエンバロを有田千代子、J・ゾーンライターの各氏に師事。リート伴奏法をD・フェーター氏に師事。ウェイン・ビアニスト・コンクール特別賞受賞。フランス、オーストリア、ドイツ、イタリアにて研鑽を積み、二〇〇四年より日本でもソロ活動のほか、リートの伴奏や室内楽などの音楽活動を行う。古典から現代までの作品に意欲的に取り組む。二〇〇五年三月、イスラムのレーベルより一枚のCD、「J・S・バッハ・ゴルトベルク変奏曲（チエンバロによる）」と「J・S・バッハ・バルティータ六番、ブームス・ビアノ小品集作品76」をリリース。

im mortal beloved Feb. 2. 2. 2007

design / ryoku yonekawa



好評発売中!

## 決定版 ベートーヴェン「不滅の恋人」の探究

青木やよひ

ベートーヴェンの死後発見された名宛人不明の一通の手紙——「私の天使、私のすべて、私自身よ」の書き出しではじまる、有名な「不滅の恋人」への手紙。「不滅の恋人」とは誰なのか?人間ベートーヴェンをより深く理解するには避けて通れないこの手紙について、後世の幾多の研究者が詰め込み挑んだ。本書はその歴史的過程を素描しつつ、著者五〇年にわたる執念の研究の成果をドラマティックに記述する。*「不滅の恋人」への思い*が、最後の三つのピアノ・ソナタなどベートーヴェン晩年の傑作にいかに色濃く反映されているか、巻末の北沢方邦による楽曲解説ともあいまって、読む者は新しい視点を提供されるはずである。

平凡社ライブラリー三二一〇頁 定価一二六〇円(税込)

## 音楽入門——広がる音の宇宙へ

北沢方邦

熱帯雨林の笛と太鼓、日本の雅楽、パリ島のガムラン、そしてベートーヴェン、メンデルスゾーンまで――「世界の音」に音楽の根源をさぐる、まったく新しい音楽入門書。

四六判上製二二二一頁 定価二三二〇円(税込)

平凡社  
〒112-0001  
東京都文京区白山2-29-4  
TEL03-3818-0874/FAX03-3818-0674  
<http://www.heibonsha.co.jp/>

連絡先: 知と文明のフォーラム東京事務局  
TEL/FAX 042-371-8165